

## フランス・ストラスブール大学との国際交流



海外交流

久保孝史\*

International Exchange between  
Osaka University and Strasbourg University (France)

Key Words : Strasbourg University, Faculty and Student Exchange

## はじめに

今ほど日本の大学に国際化が強く求められている時期はないのではないだろうか。近年、日本の科学論文数は徐々に減少し続け、さらには注目度の高い被引用数トップ1%の論文数は、約10年前(2004年～2006年の平均)は世界6位であったものが、最近(2014年～2016年の平均)では12位まで後退している<sup>1)</sup>。2000年代初め以降、世界の中での存在感が薄まりつつある我が国の科学研究であるが、その原因の一つに国際共同研究の少なさを挙げることができる。研究のオリジナリティを保ちつつも、世界の動きを柔軟に取り入れる姿勢が、大学教員に求められている。また、大学の世界的価値については、日本の大学の国際ランキングは低迷をし続け、大学を選ぶ際にランキングを気にする外国人学生にとっては魅力が薄いことから、優秀な留学生の確保が難しい状況となっている。国内の日本人学生に目を転じてみれば、1ヵ月未満の短期海外留学については近年留学者数の増加がみられるものの、1ヵ月以上の長期留学については微増にとどまっており<sup>2)</sup>、学生のアウトバウンドにも課題が残っている。

大阪大学は文部科学省のスーパーグローバル大学創成支援事業に採択されていることから、国際交流の大きな枠組みについては整備が進みつつあるが、一方で研究科あるいは専攻単位での個々の活動につ

いてまで支援が行き届いている状況ではない。国際交流には様々な形があり、それは個々の事情によるものであることから、独自の活動を自力で行っていくことが求められる。本稿では、日本学術振興会の博士課程教育リーディングプログラムに採択された「インタラクティブ物質科学・カデットプログラム」で実施している、フランス・ストラスブール大学との国際交流に関する我々のこれまでの活動について紹介する。

## 教員交流

ストラスブール大学との国際交流は、文部科学省のグローバルCOEプログラムに採択された「生命環境化学グローバル教育研究拠点(2007年度～2011年度)」で実施された教授の相互交流に端を発する。カデットプログラムでは、2014年度から教員の交流を開始した。これまでほぼ毎年のように、両大学間で教員の相互派遣を行い、化学に関する特別講義を実施している。

2014年度

Andreas Danopoulos 教授 2014/6/21～7/7

若林 裕助 准教授(基礎工) 2015/2/22～3/19

2015年度

Laurent Ruhlmann 教授 2015/11/19～12/11

久保孝史 教授(理) 2016/2/25～3/17

2017年度

Victor Mamane 教授 2018/1/14～28

2018年度

福井 賢一 教授(基礎工) 2018/7/1～15

Vladimir Torbeev 教授 2018/11/17～12/8

奥村 光隆 教授(理) 2018/2/22～3/8

ストラスブール大学の教員には、大阪大学で1単位(7.5コマ)の集中講義を提供してもらっている。カデットプログラムの受講生は英語での講義を聴講



\* Takashi KUBO

1968年5月生まれ

大阪大学大学院理学研究科化学専攻博士  
後期課程(1996年)現在、大阪大学大学院理学研究科  
化学専攻 教授 博士(理学)  
構造有機化学

TEL: 06-6850-5384

FAX: 06-6850-5387

E-mail: kubo@chem.sci.osaka-u.ac.jp

することが求められるが、海外の教授の講義を肌で感じる事ができ、よい刺激になるはずである。集中講義には講演会も含まれることから、大阪大学にはない研究も直接味わうことができるのも魅力となっている。一方、大阪大学の教員は、ストラスブール大学で教員・学生向けの講義と、一般市民向けの講義を提供している。

派遣先の大学に2～3週間と比較的長期間滞在することから、様々な教員と深く議論する機会が得られるのは、教員にとって大きな魅力である。人脈も大幅に広がり、共同研究の可能性も当然のことながら高まる。また、大阪大学の教員にとっては、ストラスブールという美しい街で生活するのは、貴重な文化経験となる。

### 合同シンポジウム

カデットプログラムでは、教員の相互派遣とは違う形の交流として、大阪大学とストラスブール大学で合同シンポジウムも開催している。教員と学生がともに参加するシンポジウムであることから、学生にとっては講義とはまた違った体験が得られる。第1回目の合同シンポジウムは、ストラスブール大学で実施した(2017/5/11～12)。大阪大学からは教員5名、学生10名が渡仏し、シンポジウムに参加した。ストラスブール大学からもほぼ同数の教員と学生が参加した。ストラスブール大学は、何人ものノーベル化学賞受賞者を輩出しており、最近では2016年にJean-Pierre Sauvage教授が受賞している。そのような場所で行われるシンポジウムに参加し、



図1 第1回合同シンポジウムの会場となったストラスブール大学の Institut de Science et d'Ingenierie Supermoleculaires にて。

実際に口頭発表した学生は他では得難い、刺激に満ちた体験をしたはずである。また、懇親会ではストラスブール街のレストランでアルザス地方の料理と白ワインを堪能し、異国文化を存分に味わったはずである。

第2回目の合同シンポジウムは、大阪大学の理学研究科J棟の中にある南部陽一郎ホールにて行った(2018/6/14～15)。ストラスブール大学からは教員6名と学生2名が参加し、大阪大学からは教員7名と学生5名が参加した。第2回は趣向を少し変え、学生と教員が深い議論ができるように、口頭発表に加えポスター発表の機会も設けた。懇親会は、箕面滝の付近にある日本家屋を改装したレストランで行い、ストラスブール大学の教員と学生に、日本の文化を知ってもらう機会を設けた(滝道で偶然にもホテルが飛んでおり、それも貴重な体験だったと思われる)。



図2 第2回合同シンポジウムの集合写真

### おわりに

内容が充実してきた大阪大学とストラスブール大学の国際交流であるが、ここに至るまでには多くの教員の貢献があったことを忘れてはいけない。グローバルCOEで交流が始まったのは、真島和志教授(大阪大学大学院基礎工学研究科)とPierre Braunstein教授(ストラスブール大学)の並々ならぬ努力のお陰である。また、カデットプログラムにおいても、多くの教員が労を惜しまず国際交流に協力してくれている。国際交流を意味のある形で実施するには、教員の熱意が最も大切である。

大阪大学ではストラスブール大学との学术交流をさらに発展させるために、理学研究科が中心となって、国際共同学位プログラム(ダブル・ディグリー・

プログラム)の構築に向けて作業を進めている。国際共同学位プログラムは、日本ではまだ珍しい制度であるが、欧州ではすでに当たり前のように実施されているものである。研究においても教育においても、世界の動きを貪欲に取り込む姿勢が大学に求められている。

#### 参考文献

- 1) 科学技術指標 2018、科学技術・学術政策研究所
- 2) 「外国人留学生在籍状況調査」及び「日本人の海外留学者数」等について、文部科学省

